

αρχη

earth-4

「グフゥ...！」

ロキが呻き声をあげた

他に言葉を発する者はなく、その後沈黙がおりた

タイフォンは上げた右膝を下ろしてその場にロキが倒れた

クロノスの後ろに居たヴァルキリーでさえ、黙っていた

「タイフォン...」

クロノスは名前を呼んだ

タイフォンは振り返り

「当然だよな」

ニコリともせずそう言った

「セトじゃ、ないんだね？」

風天は珍しく酔っていない様子で訊いた

「...」

タイフォンは黙って頷いた

死んでないよね...？

ミスラは口に手を当てたまま動揺していた

「殺すつもりだったの？」

アスは問う

「...そうだよ、だって死んでもそこの女神が治癒出来るでしょ？」

僕を治した時のように...」

指差した先はミスラ

「ひっ」

彼女は小さく悲鳴をあげる

「タイフォン...！神の力はそう簡単に使えるモノじゃないんだ」

アスは焦った表情で説明する

「じゃあ何で現在進行形で僕は少しの力しか使っていないのに、

コイツは、コイツは瀕死状態になってんの？」

痛い疑問をぶつける

「それは...」

戸惑う周辺の人たちを見渡してタイフォンは溜め息を吐き

「それに、僕は病み上がりなのに...」

説得力の無さだよな、最後にそう言って、タイフォンは校門に向う

「何処に行くんですか！」

「さあね」

タイフォンは学校を後にした

ヴァルキリーとの契約が済んだ3人

風天は酔っていない自分も悪くないかな、と手に持っていた酒瓶を床においた

ミスラはタイフォンの思惑通りロキを治癒していた

クロノスはタイフォンを探しに行っている

アスは少し落ち込んだ様子で、けどミスラの側にいた

ダイアナはぼーっと廊下の割れた窓ガラスを見ていた

ワカはヴァルキリーと話をしているようだった

全ては、タイフォンがよんだ混沌により踊らされていた

「ねえ小風ちゃんたち、タイフォンは何処にいるの？」

屋上で柵にのしかかった風天は風に話を聞いていた

『カオスノコハコヤノナカ、チイサナ、チイサナコヤノナカ』

「???'」

ある風の精は風天をからかっている様な答えを出した

『アハハハハハッ』

風の精達は風天の酒瓶で遊んでいる

「小屋の中？」

『ソウーコヤノナカ、ヒトノアツマルコヤノナカ、

イマハダレカニチョツカイカケラレ、アキレテコマツテテヲヒカレ』

「人の集まる小屋って...」

悩む。

「集会場？」

『アハハハハハハッ』

笑われた。違うのか？

すると、

『ア...』

風の精達は一つのまとまった旋風に姿を変えて何処かへ行ってしまった

「風天」

屋上にクロノスがやってきた

「人の集まる小屋の中」

振り向きもせず、呟いた

「なに？」

案の定クロノスは疑問符

「風にタイフォンの居場所を訊いてたんだ、その答え」

「...集会場？」

その答えを聞いて風天は振り返り

「違うんだ」

「じゃあ、コンサート会場かなにか？」

悩んだ顔のクロノスにヒント

「その小屋はとても小さい」

「なにかの引っ掛けか？」

風天はあの時の風の顔を思い出す

「...あれは私をからかっているようだった」

「からかって、」

！

「コンビニ！」

二人同時に答えを出した

なんだよ、このデブは...！？

「僕、太田九人です、アニメ声優 若王子樹（わかおうじいつき）クンですか？」

「違います」

コンビニの入り口で急にぶつかっていたと思ったら人違い？

おおたくのひと？アニメ声優？

「そのツンデレはいつつーでしょ!？」

「バカにしてんのか」

「ああ、今日はいつにも増して強気だ...！今日こそお持ち帰りするゾ☆」

！？

腕を引っ張られたと思ったらデブの腹に激突
ぶよぶよした腹の反動がくる
「やっやめろよ！！」

なんで他の人来ないんだよ！！

見渡すとわかった。周りに人はいなかった。

「...え？」

従業員でさえ客でさえ誰もいなかった

「僕の部屋においてよ見延葉陽（みのべはよう）クンのコスプレして欲しいなあ♡」
ぐいぐいと腕を引っ張られてコンビニの出口に近づく

ありえないだろ、なんで誰一人いないんだよ！？

...！そうだ、防犯カメラ！

奥の方にカメラがあるのが見えた

タイフオンはカメラに男の顔が見えるように動いた

「いっつー無駄な抵抗はやめて大人しくついてきてよう」

「この抵抗は無駄じゃないよ、お前が後悔する為の行動だ

死にたくないなら僕を放して土下座しろ！」

威嚇したにもかかわらずデブは輝かしい笑顔で鼻息を荒くしてきた

「今日もすっごく毒舌だね、すっごく嬉しいよ僕は！」

「やっやめろって...！」

タイフオンはそのままコンビニを出た

力を使ってやる...！！

そう決意すると頭の中でセトの声が響く

『タイフオン、一般人に力を使うと理が乱れることを忘れた？』

「だったらどうしろって...！」

『自力で乗り切れ。頭を使えよ』

時刻は正午を少し過ぎた頃、そろそろ人が集まるはず
なるべく抵抗して時間を稼げば...

「タイフオン！！」

「！」

学校方向から風天とクロノスがこちらに向かって走ってきた

「ああ！キミ達は伊織蛍太（いおりけいた）クンに

西古火滝（にしふるかたき）クンじゃあないかああ！」

男は興奮してタイフオンを掴んでいる手の力を弱めた

_____今だ！

タイフオンは男の腕を擦り抜け一度地面に手をつき男の顔に足をぶつけた

「くたばれデブ！！」

「！」

ガン！

鈍い音とともに男が倒れ、タイフオンが着地した

そして、沈黙が降りた

「...誰？コイツ」

クロノスの問いに

「只のオタク...僕を人間間違えてた」

「ヘエ...」

このデブ、どう始末する？

全員が悩んでいて、一人が声をあげる

「じゃあ私がそこのデ.....男を処理しましょう」

風天はそう言って指で風を集め始めた

指に絡むようにしていた風はいつの間にか大きな風に変わり

風天は腕でその風を操り男に向かい風を取り巻き、

「！」

男は宙に浮いた

『フウテンフウテン』

風の精が姿を現し、風天は笑顔で

「この人のお家につれてってあげて」

頼むと風の精は

『チュッ』

風天の頬に口づけをして男とともに消えた

そして、またの沈黙

「えっと...人に見せるのは初めてなんだよね」

照れくさそうに風天が言うと

「契約をします」

「！？」

気がつくヴァルキリーが立っていた

そうなるよね、風天はそう言ってヴァルキリーの目の前に立った

風天の契約を見ながら

「.....僕が間違ってたよ」

タイフォンが呟いた

「え？」

クロノスがタイフォンの顔を覗き込む

「神の力は扱い方を間違えると取り返しのつかない事になる、それに僕たちは人間だ

完全に正しくこの力を使える訳じゃない。僕たちだってこの力に飲まれて

死ぬ可能性もある...この力は軽率に使っちゃいけないんだ

だからなるべく使わないようにして、最善はこの力を一生使わない事だ」

『そうだよ、タイフォン』

「僕の場合、暴君で覇者の神の力だから...扱い方が難しい故に破壊力も相当なもの

体力の消耗も激しいから、特に危険なんだ。だから僕は、最低限この力を封印する」

静かに聴いていたクロノスは遠い目をして

「...そうだな」

相づちをうった

二人の間に風が吹いた